

原著論文

基礎看護学実習Ⅱにおける看護学生の学修状況に関する研究

—実習記録の計量テキスト分析を通して—

宮崎 久美子^a, 林 真二^b, 坪井 敬子^cResearch on Student Learning in Basic Nursing Practice II:
Quantitative Text Analysis as Seen from Practice RecordsKumiko MIYAZAKI^a, Shinji HAYASHI^b, Keiko Tsuboi^c

要 旨

本研究は、基礎看護学実習Ⅱの学生の实習記録より、学修状況とその特徴を明らかにし、続く専門領域別の看護学実習における基礎資料とすることを目的とし、計量テキスト分析という手法を用いた。結果、【実習目標及び行動計画に沿った看護実践】、【患者の状態に合わせた日常生活援助の実施】、【患者情報の把握のための工夫】、【入院前・退院後の生活を踏まえた入院中の支援】、【リハビリや日常生活動作からのアセスメントと他職種連携】、【バイタルサイン測定や治療・医療ケア見学からの気付き】、【看護実践を通じて感じた看護の知識・技術・アセスメント】、【治療や副作用がある患者へのケア】、【看護師としての様々な確認】の категорияで詳細に学修状況を明らかにすることができた。

学生はベッドサイドケアのみならず、退院後の患者の生活を見据えることや他職種との連携の上に質の高い看護実践が行われていることを学修できていた。

キーワード：基礎看護学実習Ⅱ 実習記録
計量テキスト分析

I. 緒言

看護学臨地実習は、学生が学士課程で学修した教養科目、専門基礎科目の知識を基盤とし、専門科目としての看護の知識・技術・態度を統合、深化させ、検証することを通して、実践へ適用する能力を修得する授業となっている。また実習の場は、病院、施設、在

宅、地域等の多様な場において、多様な人を対象として援助することを通して、学生が対象者との関係形成を築き、多職種連携において必要とされる連携・協働能力を養い、看護専門職としての批判的・創造的思考力と問題解決能力の醸成、高い倫理観と自己の在り方を省察する能力を身に付けることを目指すものとなっている。そのため、最初に基本的な知識や技術等を学修する基礎看護学実習Ⅰ、次に基礎看護学実習Ⅱが行われ、その後専門領域別に多様な看護実践を学修ようになる。基礎看護学実習Ⅱでは、大学で学修した看護過程や看護技術を、受け持ち療養者において実践する場であり、続く専門領域の実習の基盤ともなる。これらの実習を実現するため、看護学実習のガイドライン¹⁾では、教育の質向上等に際して、指導體制及び安全対策の構築、臨地実習前の調整を必要としており、①実習要項の作成、②実習施設との調整、③学生の臨地実習へのレディネス作りとその支援を行うことを明記している。

また看護師養成教育における臨地実習について杉森・舟島²⁾は、経験と体験を区別し、経験は知覚による客観の認識と規定すると、体験は個々の主観に属し、客観性に乏しく、知性による加工、普遍化を経ていないことから、看護学における実習は体験を経験とする学習場面であり重要な意味を持つと述べている。しかしながら、教員は実際の体験場面に居合わせることや、学生の情報の分析・判断の思考過程をリアルタイムで共有することが困難である。そこで教員は、実習記録の記述内容を通してリフレクション等を用いることにより次の意図的な看護実践へと結びつけるという教授活動をしている。さらに、相撲³⁾は、臨地実習の初期に位置する基礎看護学実習は、学生の看護師になりたいという職業に対する「思い」を高めることや困難感から得た「学び」を達成するための新たな目標を設定するきっかけになると報告している。特に、

^a安田女子大学心理学部現代心理学科

^b安田女子大学教育学部児童教育学科

^c安田女子大学大学院看護学研究科看護学専攻
安田女子大学看護学部看護学科

基礎看護学実習Ⅱは、受け持ち患者を持つことにより看護過程を展開することになる。伊藤⁴⁾は、情報収集の意図や方法のつかめない学生や、患者との関係性を築きにくいことから自己中心的なアセスメントをする学生の状況を指摘している。杉森・舟島⁵⁾は、看護学の初学者である学生は、患者の状態のアセスメントや看護に対する患者の反応を正確に知覚する能力が未熟であるとも言っている。

このような基礎看護学実習Ⅱの意義及び目標を達成し、実習生や教員が抱える課題を解決するためには、詳細な実習生の学修状況を明らかにすることが必要だと考えた。本研究は、基礎看護学実習Ⅱの学生の実習記録より、学修状況とその特徴を明らかにし、続く専門領域別の看護学実習指導における基礎資料とすることを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 研究対象

研究対象は、A大学医学部保健学科看護学専攻において、基礎看護学実習Ⅱ（2015年2月9日～2月20日）に参加した学生68名の実習記録である。実習記録には、日々の実習日誌があり、「実習で感じたこと・考えたこと」の記述欄に記入されたテキストデータを分析対象とした。実習日誌は10日間記載され、508枚の記録があった。

2. 分析方法

本研究は、学生の学びを明らかにするため、テキスト型データについて、定量的言語解析（テキストマイニング：Text Mining）を行い、質的分析を行った。分析ソフトウェアはKH Coder³⁾を用いた。分析では、記録内容の1枚を1レコードとして、表計算ソフトExcel（ver.2016）にデータ入力した後、ソフトウェアに投入した。データセット後、記録内容は、ソフトウェアの前処理（形態素解析）機能を実行し、自由記述データの単語の分解を行った。これら一連の作業を手作業で行うには、分析者の解釈に大きく影響を受けるため、自動化された分析ソフトウェアにより客観性を担保しその信頼性を高めた。その他、複合語として「看護師」、「バイタルサイン」は強制抽出し、「カンファ」は「カンファレンス」、「Dr」は「医師」のように短縮略語の変換をし、誤字・脱字について修正した。

まず、実習記録で多く使用された単語を確認するため、頻出語を抽出した。次に、共起関係にある語同士を線で結ぶ共起ネットワーク分析を用いた。分析に使用する品詞は名詞に設定し、出現頻度が30語以上かつ、語と語の共起性の強さを示すJaccard係

数を選択し、0.15以上にある共起関係の語を抽出した。図は布置されるデータが確認できるよう視覚化を考慮した。また、共起ネットワークでは、抽出された語が、どのような文章中に共起していたのかを調べるため、統計ソフトウェアに装備されているKWICコンコーダンスを使用し、抽出語前後の原文を読み込み、内容の解釈により筆者らがカテゴリー名を付けた。

Ⅲ. 倫理的配慮

研究参加への協力依頼は、説明文書を用いて研究内容・人権擁護に対する配慮・参加の自由を説明し、加えて本研究以外には使用しないこと・成績評価済みであること・データは匿名化することも説明し、同意書の提出を持って同意を得た。

データ収集後の実習記録については研究責任者の研究室の収納庫に厳重に保管し、分析後返却希望者に返却した。尚、本研究は、A大学病院臨床研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号2266）。

Ⅳ. 結果

1. 対象

508枚の実習日誌より、「実習で感じたこと・考えたこと」の記述は464のレコードがあり、4907文、総抽出語数160,032語が抽出された。共起ネットワーク分析に使用する抽出語は、出現する最小頻度が30語以上ある名詞を抽出し、121の抽出語が得られた。

2. 共起ネットワーク分析とデータ

得られた121の抽出語より共起ネットワーク分析を行い、9つのカテゴリーグラフ（①～⑨）が得られた（図1）。カテゴリー別の抽出語は表1に示す。図1においては、視覚化が分かりやすくなるよう①以外のカテゴリーを破線で括った。図の丸が大きいほど、その抽出語が多く出現していることを表しており、丸の最も大きい患者を中心に共起関係が描かれた。図に描かれた抽出語は、ソフトウェア機能より、実習記録上の原文データを確認できるため、カテゴリーを形成している主要な原文データから、学生が「考えたこと・感じた事」の内容に関して解釈しカテゴリー名を命名した。以下に、9つのカテゴリー（①～⑨）とカテゴリー内の抽出語及び出現頻度を示し、原文データと合わせて、カテゴリーの命名と解釈について述べる。

1) カテゴリー別の抽出語及び出現頻度

カテゴリー内の抽出語が多いのは、①のカテゴリーで28語より構成されていた。次いで③のカテゴリーが20語、②のカテゴリーが17語、④のカテゴリーが15語、⑤及び⑥のカテゴリーが13語、⑦のカテゴリーが10語、⑧及び⑨のカテゴリーが4語で構成されていた。抽出語の出現頻度は、①のカテゴリー内で、「患者」の単語が2325回と最も多く、次いで「看護師」(561回)、「ケア」(362回)であった。これらは他のカテゴリー内にある単語と比べても多く出現していた。①のカテゴリー内で他に100回以上の出現頻度は、「実習」(249回)、「話」(235回)、「状態」(173回)、「気持ち」

(149回)、「コミュニケーション」(145回)、「行動」(126回)、「病棟」(116回)があった。

他のカテゴリー内において、カテゴリー内の上位3位以上の出現頻度又は100回以上の出現頻度をみると、②のカテゴリーは「清拭」(125回)、「シャワー」(106回)、「交換」(90回)、③のカテゴリーは「情報」(227回)、「会話」(139回)、「家族」(133回)、「手術」(130回)、④のカテゴリーは「観察」(216回)、「様子」(169回)、「退院」(165回)、「生活」(127回)、「お話」(116回)、「入院」(100回)、⑤のカテゴリーは「リハビリ」(128回)、「一緒」(79回)、「本人」及び「歩行」(75回)、⑥のカテゴリーは「測定」(250回)、「バ

表1 カテゴリー別の抽出語

語数	①		②		③		④		⑤	
	抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
1	患者	2325	清拭	125	情報	227	観察	216	リハビリ	128
2	看護師	561	シャワー	106	会話	139	様子	169	一緒	79
3	ケア	362	交換	90	家族	133	退院	165	本人	75
4	実習	249	洗髪	86	手術	130	生活	127	歩行	75
5	話	235	足浴	79	言葉	86	お話	116	低下	63
6	状態	173	介助	75	収集	84	入院	100	転倒	62
7	気持ち	149	ベッド	71	受け持ち	77	説明	87	トイレ	58
8	コミュニケーション	145	実施	63	自身	70	発言	84	医師	57
9	行動	126	シーツ	47	症状	66	把握	64	療法	52
10	病棟	116	状況	44	痛み	65	意識	64	部屋	46
11	担当	96	移動	39	表情	65	内容	56	心配	40
12	援助	94	練習	38	工夫	60	指導	54	リスク	31
13	勉強	84	皮膚	38	カルテ	44	安心	53	指示	30
14	カンファレンス	83	準備	35	創部	41	日常	32		
15	目標	81	身体	35	仕事	41	使用	32		
16	報告	77	安楽	33	医療	40				
17	体調	76	手技	30	疼痛	39				
18	質問	73			感染	36				
19	学生	72			麻酔	33				
20	反省	71			事前	32				
21	病室	70								
22	変化	68								
23	負担	62								
24	緊張	62								
25	経験	49								
26	計画	44								
27	師長	39								
28	タイミング	38								
計		5680		1034		1508		1419		796

語数	⑥		⑦		⑧		⑨	
	抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度	抽出語	頻度
1	測定	250	看護	122	治療	168	確認	156
2	バイタルサイン	241	知識	80	副作用	70	食事	124
3	血圧	151	アセスメント	70	思い	43	検査	103
4	声かけ	117	実感	63	放射線	36	回数	39
5	検温	95	技術	52				
6	見学	94	疾患	52				
7	点滴	62	関係	42				
8	呼吸	62	対応	40				
9	チェック	49	週間	35				
10	予定	44	不足	33				
11	脈拍	38						
12	処置	35						
13	体温	35						
計		759		335		317		422

イタルサイン」(241回)、「血圧」(151回)、「声かけ」(117回)、⑦の категорияは「看護」(122回)、「知識」(80回)、「アセスメント」(70回)、⑧の категорияは「治療」(168回)、「副作用」(70回)、「思い」(43回)、⑨の категорияは「確認」(156回)、「食事」(124回)、「検査」(103回)であった。

2) カテゴリの解釈と命名について

①から⑨の9個の категорияは、その categoria に含まれる語や語の前後の文脈を読み、順に【①実習目標及び行動計画に沿った看護実践】、【②患者の状態に合わせた日常生活援助の実施】、【③患者情報の把握のための工夫】、【④入院前・退院後の生活を踏まえた入院中の支援】、【⑤リハビリや日常生活動作からのアセスメントと他職種連携】、【⑥バイタルサイン測定や治療・医療ケア見学からの気付き】、【⑦看護実践を通じて感じた看護の知識・技術・アセスメント】、【⑧治療や副作用がある患者へのケア】、【⑨看護師としての様々な確認】の categoria 名を命名した。以下に、categoria 別に主な原文データを示す。原文データは〈 〉で示し、原文データの中で categoria 名に関連するキーワードとなった語は下線を引いた。一方、categoria 名に使用された語は、原文データに含まれる語と必ずしも一致した語でないが、原文データ内の語の意味内容に類似するよう解釈し命名した。

①実習目標及び行動計画に沿った看護実践

この categoria 内の単語は、学生が立てた実習の目標や行動計画に基づく看護の実践について記述された原文データに含まれていた。原文データとして、〈患者の言葉や行動からニードを把握し、少しでもケアできるよう意識して行動したいと思った〉、〈行動計画では、前日の検温のときに聞けなかった質問ができて、そこはよかったところだと感じた〉、〈看護師は全体の流れを把握したうえで優先順位や段取りをよく考えて行動している〉、〈今日の目標であるケアの実施や見学の際、患者さんの負担をかけるまいとよく考えて行動することについては、ほとんど達成できたと感じる〉、〈カンファレンスでは、行動計画について申し送りが聞けていないとの注意があった〉、〈実習目標であったコミュニケーションをはかることは10分程度しかできなかった〉、〈最初は緊張して一つずつしかできなかったことがスムーズにできるようになった〉といった【実習目標及び行動計画に沿った看護実践】が記載されていた。

②患者の状態に合わせた日常生活援助の実施

この categoria 内の単語は、患者への日常生活援

助に関して、感じたことや学びについて記述された原文データに含まれていた。原文データとして、〈私達は健常者同士で清拭を行っているので、力加減、体位変換、寝衣交換、可動域をそれほど意識していなかった〉、〈患者さんの安楽・安全を保つことができるように、手順等をきっちり勉強しておくことが重要だと感じた〉、〈食事介助は、患者さんのペースに合わせて、かつ嚥下の状態を見ながら実施する必要があった〉、〈シャワー浴の際にオムツの用意を忘れ、患者さんに迷惑をかけてしまった〉、〈寝衣を変える時の状態や清拭などの皮膚が見える時の観察はかかせない〉といった【患者の状態に合わせた日常生活援助の実施】が記載されていた。

③患者情報の把握のための工夫

この categoria 内の単語は、患者の看護ニードの把握や看護ケアのために必要な受け持ち患者の情報に関して、その収集方法やコミュニケーションの取り方などを考察された原文データに含まれていた。原文データとして、〈電子カルテや看護師に積極的に質問することを通して情報を取り入れたい〉、〈患者や付き添いでいた人と会話していると、カルテに載っていない既往歴や心情、育った環境などの情報を知ることができた〉、〈看護師の方は患者との何気ない会話から情報を聞き出しており、聞き方にも工夫をする必要があると思った〉、〈担当看護師に付き添う中で様々なケアの方法や効率の良い情報収集の行い方を学ぶことができた〉、〈申し送りは、バイタルサインの数値のみでなく、手術名や創部の様子、どういったカテーテルがどの部位に挿入されているか、投薬した薬剤の名前と時間と量、痛みコントロールの状況などあらゆる情報を伝えていくことが必要であると学んだ〉、〈患者だけでなく、家族からも情報収集をしなくてはならないと思った〉といった【患者情報の把握のための工夫】が記載されていた。

④入院前・退院後の生活を踏まえた入院中の支援

この categoria 内の単語は、患者の入院前の日常生活状況や、入院中、退院後の生活に関する事やそれを踏まえた入院中の支援について記述された原文データに含まれていた。原文データとして、〈長い治療と入院生活で苦痛を感じているようなので、その苦痛を少しでも和らげる援助をしっかりと考え〉、〈(歩行訓練は)ただ距離を長くするのではなく、生活スタイルに合った距離や術後であり心臓への負荷が少なくなるように考えなければならない〉、〈退院後、できるだけ長く自宅で過ごせるようにするため、食事管理や服薬管理、転倒の防止が必要になっ

てくると考えた)、〈入院する前までの生活リズムと大きな違いはないかや、退院した後に大きな影響はないかなど考えていきたい)、〈セルフケアはできていたが、退院に向けての意識があまりないように感じた〉といった【入院前・退院後の生活を踏まえた入院中の支援】が記載されていた。

⑤リハビリや日常生活動作からのアセスメントと他職種連携

このカテゴリー内の単語は、患者のリハビリテーションと一緒に付き添ったり、日常生活動作への看護援助を通して、学生がアセスメントについて考えたことや、同様に支援する他職種との連携・情報共有の機会を通じて学修したことが記述された原文データに含まれていた。原文データとして、〈患者さんの話し相手になることや一緒に歩くことでも、少しは患者さんの役に立つことができているのかなと思えた)、〈退院に向かうということで、リハビリや説明など退院を見据えたものが多かったように感じた)、〈リハビリ前後の疼痛の変化を確認したが、疼痛スケールを聞くのを忘れていた)、〈リハビリ後も歩く意欲はあり、一階までテレビカードを一緒に買いにいったり病棟内を一周歩いたりすることができた)、〈筋力が低下すると、つまずきやすくなり転倒のリスクが生じるということまで考えられないといけなと感じた)、〈看護師、医師、言語聴覚士が毎日していることは、眼球運動の確認、嚥下障害の確認、手足、舌の筋力と反射の確認、見当識の確認である。毎日よく観察して、低下している機能に気づくことが大事である)、〈看護師は理学療法士の行うリハビリに対してケアしたい内容やリハビリ内容を相談し合う対等な存在であり、これを行うことがチーム医療なのだということを学んだ〉といった【リハビリや日常生活動作からのアセスメントと他職種連携】が記載されていた。

⑥バイタルサイン測定や治療・医療ケア見学からの気付き

このカテゴリー内の単語は、バイタルサイン測定や患者の治療・医療処置等の見学を通して、看護師のケアの方法について考察した事が記述された原文データに含まれていた。原文データとして、〈看護師の見学では、自然に声かけをしながらバイタルサイン測定をされていて、自分が行わせて頂く際も気をつけようと思った)、〈学生同士で測定し合うのとは違う感じがした。もう少し声かけが出来たらよかった)、〈バイタルサイン測定し、高齢者は脈拍や血圧が測定しづらいことを実感した)、〈観察項目を自分なりに考えて、測定に行ったが、足りないことも多く難しかった)、〈バイタルサイン測定は以前より

も何を見たらよいか分かるようになったので、すばやく行えるようになった)、〈胃カメラの検査を見学させてもらえ、検査室の看護師の動きをみることができ、動きと声かけとか、病棟の看護師とは違う面を見ることができ勉強になった)、〈術後の看護について、勉強してから見学するとたくさんの所に気配りが見え、また知識を確認でき、とても勉強になった)、〈点滴を持続しているため、輸液中の看護や注意点などについて知っておく必要があった)、〈自分が理解していなければならないことは、処置の仕方や効果だけでなく、処置を行うことで患者さんどのような苦痛や不安があるかを考え、患者さんの立場になって痛みを理解しようと努力すること〉といった【バイタルサイン測定や治療・医療ケア見学からの気付き】が記載されていた。

⑦看護実践を通じて感じた看護の知識・技術・アセスメント

このカテゴリー内の単語は、看護実践を行った学生が感じた自身の看護の知識や技術、アセスメント力に関する原文データに含まれていた。原文データとして、〈事前の情報収集と分析やアセスメントの大切さを実感した)、〈バイタルサインやフィジカルアセスメントの基礎的な知識、技術ができていないと実感した)、〈決めた項目を測るのみでなく、その測定値を普段の値と比べてどうなのか、アセスメントし、観察項目を広げていくことができた)、〈疾患や治療についての知識や患者さんのニーズを見出すことの必要性を学ぶことができた)、〈治療や疾患、それに伴う痛みや日常生活制限、服薬状況や副作用の知識を持ち、どのようなケアリングが行えるか考察する必要があった)、〈知識といっても技術的知識はもちろん、ケア的知識もしっかり持った看護師になれるように日々歩んでいきたい〉といった【看護実践を通じて感じた看護の知識・技術・アセスメントについて】が記載されていた。

⑧治療や副作用がある患者へのケア

このカテゴリー内の単語は、治療や副作用を有する患者への関わりを通して、患者の思いや援助的な人間関係の構築に関して記述された原文データに含まれていた。原文データとして、〈治療に対する前向きな気持ちばかりでなく、不安や恐怖などの気持ちも言ってもらえるようになることが信頼関係作りには大切だなと思った)、〈患者の思いを受け止めた上で、不安にならないような声かけやねぎらいの言葉をかけるなどが必要である)、〈点滴や薬の副作用など、視点を広げて様々な観察を行う必要がある)、〈化学療法と放射線治療も行っているため、患者さんの体調の変化にも注意が必要である)、〈退院して

Ⅳ. 考察

基礎看護学実習Ⅱの学び・感じたことに関する実習記録は、共起ネットワーク分析により、【実習目標及び行動計画に沿った看護実践の学び】、【日常生活援助の実施に関する事】、【カルテや患者・家族との会話より得た情報に関する事】、【入院中や退院後の生活に関する患者の発言や意識】、【リハビリへの付き添いや日常生活動作からのアセスメントと他職種連携】、【バイタルサイン測定や治療・医療処置見学からの気付き】、【看護実践を通じて感じた看護の知識・技術・アセスメント】、【治療時や副作用がある患者へのケア】、【看護師としてよく確認しておくこと】の9個のカテゴリーで構成されていた。

カテゴリーの中では、【実習目標及び行動計画に沿った看護実践の学び】に関する事が、抽出語数、出現頻度の総計とも多く、学びの中心に位置していると言える。特に、基礎看護学実習Ⅱでは、各学生は患者一人を受け持ち、情報収集とアセスメントを通して初めて看護上の問題をあげるとともに、問題解決のために看護計画を立案し実践していくといった実習過程より、自分の立てたケア目標が行動計画に沿って実践できたかに着目しやすかったと考えられる。これより、「実習」、「目標」、「行動」、「計画」、「援助」のキーワードが頻出しており、「担当」する「看護師」への「報告」や「師長」・「学生」との「カンファレンス」及び自己の「反省」を通して、学びに変えていったものと考えられる。

しかしながら、看護問題の提起に関する記載は少なく、「看護問題」という単語は3つの出現頻度に留まっていた。単に「問題」という単語でみると28語あるものの、例えば「患者の状態は問題ない」、「問題なく動く」、「特に問題ない」、「問題点について発表する」など、多くは看護上の問題の意味に該当するものではなかった。千田ら⁶⁾の基礎看護学実習Ⅱの学生のレポート内容を分析した研究でも、看護を展開していく中で、看護上の問題の抽出などのカテゴリーが少ないことが報告されており本研究も同様であった。その理由として看護援助の計画を立て、援助を行うことに精いっぱい力を注いでいることの影響を報告している。本研究においても、学生が直接行った看護援助に関して、主に、【実習目標及び行動計画に沿った看護実践の学び】、【日常生活援助の実施に関する事】、【バイタルサイン測定や治療・医療処置見学からの気付き】、【看護実践を通じて感じた看護の知識・技術・アセスメント】の4個のカテゴリーにおいて記載がみられた。その中には、〈実習目標であったコミュニケーションをはかることは10分程度しかできなかった〉、〈シ

ャワー浴の際にオムツの用意を忘れ、患者さんに迷惑をかけてしまった〉、〈観察項目を自分なりに考えて測定に行ったが、足りないことも多く難しかった〉、〈バイタルサインやフィジカルアセスメントの基礎ができていないと実感した〉など、看護知識や技術不足に関する各学生の困難感や課題についての記載も多く示されていた。

一方で【看護師としての確認】のカテゴリーでは、医療ケアについて看護師へのシャドウイングや指導を通して、〈モニターの変化を見るようにしたり、チューブ、ルートを引っ張っていないか、取れていないかを確認〉したり、検温時の確認では〈食事の量や吐気などを観察し、副作用の確認〉をする等、看護師の役割や看護実践、医療管理の状況を理解する機会も得られたと考える。

その他、【入院前・退院後の生活を踏まえた入院中の支援に関する事】、【リハビリへの付き添いや日常生活動作からのアセスメントと他職種連携】、【治療や副作用がある患者へのケア】などのカテゴリーは、その原文データにおいて、患者とのコミュニケーションやリハビリ・治療の付き添い・見学等から学生が感じ取った学びが記載されていた。原文データでは、〈長い治療と入院生活で苦痛を感じているようなので、その苦痛を少しでも和らげる援助をしっかりと考え〉たり、〈退院後、できるだけ長く自宅で過ごせるようにするため、食事管理や服薬管理、転倒の防止が必要になってくる〉などが記載されており、患者の基本的ニーズを把握し、満たすための日常生活援助を考えたり、患者の潜在的・顕在的な力を見出し、その力を生かすよう必要性について、実習目標にそった学びを得ていたと考えられる。また、〈患者さんの話し相手になることや一緒に歩くことでも、少しは患者さんの役に立つことができる〉ことや〈リハビリ後も歩く意欲はあり、1階までテレビカードを一緒に買いに行ったり病棟内を一周歩いたりした〉こと、治療・副作用に対しても〈不安や恐怖などの気持ちも言ってもらえるようになること〉、〈気持ちを受け止めた上で、不安にならないような声かけやねぎらいの言葉をかける〉などの関わりも省察しており、実習目標とした受け持ち患者との間で、学生は相互的な尊重・信頼を基盤とする援助的人間関係を築くよう努めていた事が推察できる。さらに、退院後の生活を見据えて、〈入院する前までの生活リズムを大きな違いはないかや、退院した後に大きな影響はないか〉、〈退院しても副作用をうまく付き合っていくために、私のパンフレットの活用〉を考えるなど、病棟実習から多様な場の看護について考える機会もあったと考えられる。そして、〈看護師、医師、言語聴覚士が毎日していること〉のケアを理解し

たり、〈看護師は理学療法士の行うリハビリに対してケアしたい内容やリハビリ内容を相談し合う〉など、多職種連携における連携・協働能力及びチーム医療についても学べる機会があったと考えられる。

コントリビューター：大森 美津子 教授
(看護学科)

VI. 本研究の限界と課題

基礎看護学実習Ⅱの実習目的は、主要な柱は実習ガイドラインに沿う形で進められるが、各大学の学生のレディネスや各地域の実習環境やその調整によって、各大学の特色の違いもあるため、A大学の学びを一般化するには十分ではない。しかしながら、基礎看護学実習Ⅱは、それ以降の各看護領域に進むまでの起点となるため、連動を考えながら、各領域の看護実習を検討する基礎資料となったと考える。

テキストマイニングの分析方法として、共起ネットワーク分析を用いたが、共通性や特徴を捉えるために出現頻度の高い単語を分析対象とした。テキストマイニングは、大量データの分析に有効であるが⁸⁾、大量であるがゆえに出現頻度の少ない単語を分析できなかったり、学生によって同じ意味でも用いる単語が異なる可能性もあったことは、分析手法における本研究の限界である。

引用文献

1. 文部科学省ホームページ. (2020) 看護実習ガイドライン
2. 杉森みどり, 舟島なをみ. (2004) :看護教育学・第4版, pp.252, 医学書院, 東京.
3. 相撲佐希子. (2016) 1年次前期の基礎看護学実習が初期学生の「学び」と職業に対する「思い」に及ぼす影響. 日赤看会誌, 16(1):41-46
4. 伊藤洋子. (2003) 基礎看護学実習Ⅱにおける看護過程の学習状況-学生のアセスメントプロセスと指導上の課題-. 飯田女子短期大学紀要, 第20集:77-95
5. 樋口耕一 (2014) :社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して, ナカニシヤ出版, 京都.
6. 千田美紀子, 今井恵, 松永早苗他. (2015) A看護大学の基礎看護学実習Ⅱにおける学生の学びの分析. 聖泉看護学研究, 4:47-54
7. 岡田初恵, 榎本朋子. (2011) 基礎看護学実習Ⅱにおける実習過程に伴う看護学生の思い-達成動機が高まった学生を対象とした調査から-. 川崎医療短期大学紀要, 31:7-13
8. 日和恭世. (2013) ソーシャルワーク研究におけるテキストデータ分析に関する一考察. 評論・社会科学, 106:141-155

[2022. 10. 6 受理]